

る舞鶴港に近づき棧橋に着いた。船員の皆さんありがとう、信濃丸よありがとう、と幾度も一人つぶやいた。棧橋を渡るとき、とめどなく涙がこぼれた。

棧橋にこぼす涙や冬紅葉

ともあれ母待つ祖国へたどり着くことができた。一日も欠かさず陰せんを供えてくれた母も三十年前亡くなり、私も古稀の峠を越えた。余りにも悲惨で文字にできなかったことも多くあった。地獄絵図のシベリアを体験して、この思いを決して風化させたくないという一人です。

私のシベリア抑留

岐阜県 杉山 博

一、昭和十九年八月十五日、滋賀県八日市市第八航空教育隊（中部第九八部隊）に入隊、第七中隊、第三中隊に所属、戦闘機の整備教育を受ける。

二、昭和二十年二月二十五日、原隊復帰により、哈爾濱市第二六教育飛行隊（第一六六一六部隊）に移る（我々の原隊）。

昭和二十年三月、派遣により拉林第一二野戦航空修理廠へ移る。戦闘機整備教育のため。

昭和二十年七月、教育を終え、原隊復帰のため桂木斯第一〇野戦航空修理廠へ移る。原隊が同所移動していたため。

昭和二十年八月、ソ連の侵攻により、十日ごろ無蓋車にて哈爾濱に向けて南下する。哈爾濱の近くの平房の飛行場に入り終戦を正式に知らされる。そして、武装解除を受け、捕虜となる。

三、昭和二十年八月下旬、徒歩にて阿城に至り、汽車に乗り北に向かう。一面坡でおろされ、その後、一週間歩きづめで、捕虜収容所である海林の弾薬庫跡に入る。

昭和二十年十月牡丹江に移り、ソ連の蚕棚のような貨車に乗せられ、虎林、虎東を通りソ連領に入り、シベリア鉄道を一路北に向けて進み、ハバロフスクを経て西進し、十日ほどしてイズベストコーワ駅に着き

下車させられる。

四、イズベストコーワヤの丘の上の幕舎づくりの収容所に入れられ、別に決まった作業はなく、農場の収穫作業の手伝いをする。

その後、身体検査を受け、痩せていたためオカのレットルを貼られ、駅近くの収容所（設備のある程度整った）へ移り軽作業につく。食事どき、黒パンの分配に班の全員の目が光る中、食事当番がくじで取る順番を決めて分けている光景は、あまりにも情けないことであった。

昭和二十一年二月、汽車とトラックを乗り継ぎ、テルマの町の郊外の廃屋のような収容所に入る。道路作業、伐採等の作業に従事。

昭和二十一年四月、テルマの町の中の収容所に移り、鉄道の荷役作業に従事。自分の体ほどある穀物袋はさすが身にこたえた。

間もなく近くの別の収容所に移り、昭和二十一年六月ごろ、収容所のメンバー十名で編成された木の実採取作業の一名に選ばれ、収容所から十キロメートルほ

ど離れた高原に幕舎を張り、監視兵なしで木の実（ヤーガタ）採りを行う。秋になり、コケモモ実を採集し、最後は壁の下の細い木造りを行い、元の収容所へ帰る。昭和二十二年一月、テルマの川上の収容所に移る。最初は食堂ボーイの仕事につく。

昭和二十二年四月ごろ、体力がついたので鉄道作業にかり出される。土砂を運んでくる汽車の都合で昼夜の別なく働かされ、さすが体にこたえた。

昭和二十二年六月、大腸カタルにて倒れ入室する。軍医が見舞いに来てくれた戦友に、小声で「もう杉山はだめだ、戦友で会わせたい者がいたら知らせてやれ」と言っているのを夢の中で聞きゾットとしたものだ。

昭和二十二年七月、我々のいた収容所の建物の一つが、ハラシヨラポータ憩いの家なるものができ、付近の各収容所からハラシヨラポーターが三名程度選ばれて送り込まれてきた。私も、何を間違えられたのか、ハラシヨラポーターに選ばれ、その建物に入ることになった。

ちようどそのころ、この地区も東京ダモイが始まり、私のいた収容所も候補者の選衡が始まり、運よくダモイ組に入ることとなった。

しばらくしてダモイ列車の人となったが、ダモイでさる嬉しさに夢うつつのうちにナホトカに着き、その辺のことはあまり記憶に残っていない。

昭和二十二年八月上旬、ナホトカから船の人となり、舞鶴に無事上陸。中津川の駅に降り立ったのは八月十三日の夜であった。

五、戦後の不況の中へほうり出され、就職もままならない時であったが、昭和二十二年十月価格調整公団(敗戦後の経済復興を調整する団体)に就職。昭和二十五年、同公団は戦後処理の役目を終えたので閉鎖された。

昭和二十五年七月中津川商工会議所に入り、定年まで職員として勤め、その後、専務理事として任期六年勤め、辞任。

シベリア抑留記

静岡県 斉藤 文一郎

1、出生から入隊

住 所 静岡県掛川市本所三九六の一

出生年月日 明治四十五年三月三十日生

学 歴 大正十五年三月 東山口尋高卒

就 職 大正十五年四月 東山口村役場

書記就職

家族構成 父 自己 妻 子供四人

2、ソ連軍侵攻前

昭和十八年十二月十日 臨時召集令状 中部第

九部隊三島重砲第二連隊に集結する

陸上勤務 第八十四中隊入隊

駐屯地 満州国東寧県大肚子川

兵員 昭和二十年八月当時 百五名の留守隊

3、ソ連軍侵攻